

契丹の地域土器生産

白 杵 勲

要 約

契丹国（遼）の窯業生産は、陶磁器・陶質土器・瓦・埴など多岐にわたり、大量生産・広域流通と、地域別の生産・流通という2つの形態がある。従来の研究では、前者に大きく調査・研究が偏り、後者については実態が不明であった。本稿では、このような偏りを是正し、契丹領内に広く普及していた地域的な窯業生産の実態を解明することを目的とする。そのために、契丹の辺防州であるチントルゴイ城址（鎮州建安軍）における地域生産・流通の実態を、城址周囲に位置するチントルゴイ窯址群の土器組成を、消費地である城内の什器類や契丹陶磁器全般の組成と、比較・検討することから、明らかにする。さらに、文様・器種の分析から地域土器生産の系譜を考察する。

キーワード：契丹，陶質土器，陶磁器，土器組成

はじめに

シラムレン川流域を中心とする遊牧集団であった契丹は、10世紀初めに耶律阿保機の下で政治統一を果たし契丹国（遼）を建国する。やがて、中国東北地域に位置した渤海国を滅亡させるなど勢力を伸ばし、やがて中国北辺の燕雲十六州を領内に取り込むこととなった。その後、北宋と対峙しつつも、1004（統和22）年の澶淵の盟締結後は、安定した平和が継続し、両国間の交易や国内生産などの経済活動も盛んとなった。契丹国内には、都城の五京をはじめとする多数の都市が建設され、契丹人・漢人・渤海人などの多様な出自の住民が居住し、契丹独自の文化に他集団の風俗・文化を取り込むこととなった。特に、唐・五代と渤海の文化的影響が大きいことが知られている。そのため、各種の生産においても、契丹本来の技術・様式に、他集団の技術・様式が組み合わせられることとなった。

以上のような契丹文化の具体的な解明には、考古資料が大きな役割を果たしてきた。それは、契丹国が女真族の起した金に滅ぼされたため、現存する史料・美術品・建造物などの資料が多くはないためである。生産・流通の解明にも、発掘調査による新資料をもたらしことのできる考古学が貢献できることは間違いない。

契丹考古学研究において、大日本帝国の大陸進出との関連という負の側面を持つにせよ、日本人が先駆的役割を果たしたことは確かである。鳥居龍蔵による積極的な取り組みの他にも（鳥居1937）、島田正郎・田村実造らによる各種遺跡の調査（田村・小林 1953）、関野貞・竹島卓一らの建造物調査（関野・竹島 1943）、三上次男・小山富士夫らの陶磁器関連調査などが知られている（三上 1981a・b, 小山 1970）。

一方、太平洋戦争が終了し、新中国が成立すると中国研究者により、契丹考古学研究が開始され、大きな成果を挙げてきた。また、領土の一部が契丹国の領域内に含まれるモンゴル国でも、ロシア・モンゴルの研究者らによる調査が進展し、ケルレン川・オノン川流域の都市遺跡の調査が進められてきた。

その後、1990年代からモンゴル国でモンゴル帝国前後の遺跡の調査研究を進めてきた白石典之は、契丹遺跡についても調査を進め、モンゴル高原におけるそれらの遺跡の意義を明らかにした（白石 2002）。また、2006年以来、筆者を含む日本人研究者グループは、トーラ川流域において契丹遺跡の調査をモンゴル科学アカデミー考古学研究所と共同で継続している（臼杵・エンフトゥル 2008, 千田他 2010）。

以上のように、現在では現地研究者を主体に、研究が進められ、多くの成果が蓄積されつつある。ただし、調査の主体が、中国では墳墓遺跡、モンゴルでは都市遺跡に置かれ、その他の遺跡については、本格的な調査例が少なく活発化していない。特に、窯業・金属などの生産址遺跡の調査は、一部に限られ、資料の蓄積が進んでいない。そのため、生産・流通研究の面では多くの課題が残されている。

その中で、2007年に、筆者らが調査を継続している都市遺跡、モンゴル国ブルガン県チントルゴイ城址遺跡において、モンゴル・ロシア共同調査隊のメンバーにより、城址南方約300mの位置に、窯址群が発見された。ここでは、都市内で使用された陶質土器・瓦・磚などが製作され、契丹国の地方都市における生産の様相を具体的に示す資料であると予想された。そこで、2008年に、窯壁体や土器片が散乱し小動物による破壊をこうむっていると考えられた窯址に試掘調査を行い、同時に周囲の地形測量と遺跡探査を実行し遺跡の範囲確認を行った。この結果、窯址周囲約100m四方内に複数の窯址が存在する可能性が確認された。また、窯は予想以上に遺存状態が良好で、壁体・床が保存されていることが確認できた。そこで2009年に、この窯（1号窯）の発掘調査を実施し、契丹の土器・瓦生産の具体的な解明に取り組むこととした。さらに2010年には窯の周辺部を発掘し、作業場などの窯の操業実態の解明を試みた。この2年間の発掘により、契丹時代の土器・瓦窯の形態を明らかにすることができ、また生産された土器・瓦についても多くの資料を得ることができた。本稿では、以上の資料の中から特に土器生産に焦点をあてて、土器様式の観点から考察していく。この作業により、契丹の地方における土器生産の実態解明に有効な資料を提供することができよう。

1. 契丹の窯業生産研究の推移と今後の課題

契丹の従来の窯業生産研究は上記したように戦前に日本人研究者により始められた。現在の遼寧省に所在する缸官屯窯址群を日露戦争直後に足立陽太郎が発見し、1922（大正11）年には八木奘三郎も視察している（三上 1974）。しかし、大きく注目を引くこととなったのは1933（昭和8）年以降であり、奉天博物館の陶磁器整理をきっかけとして、所蔵されていた契丹陶磁器への関心が高まり、知識が蓄積されていくこととなった。さらに、契丹窯址の発掘も実施され、三上次夫による遼寧省缸官屯窯址（三上 1974）、黒田源次らによる内蒙古赤峰市缸瓦窯址、小山富士夫らによる赤峰市上京周辺諸窯址（小山 1970）、が調査された。その結果、遼三彩や、鶏冠壺などの契丹独自の器形の存在が確認された。これらの調査の多くが大戦中に実施されたため、それらの成果は戦後になってようやく美術全書等で紹介されることとなる。

一方、1949年の新中国設立以来、新たな体制で契丹考古学が伸展することとなる。1970年代までに窯址の発掘は数ヶ所で実施され、さらに墳墓の発掘の類例が増えたことにより、契丹陶磁に関する情報が増加した。墓誌との共伴により年代が明確化された資料が増加したことも重要であった。この時期に、契丹の陶磁器の概説もまとめられ（李 1958）、基本的な知識は確立した。

1970年代以降は、三上次男ら戦前の調査者らにより、日本人の戦前の成果に新中国の成果を加えて、契丹陶磁を総括的に述べる全書・図録が複数出版された（三上1981a・b、弓場1998など）。中国側では、赤峰市缸瓦窯址（馮謙 1984）、山西省界庄窯址（馮先銘 1984）、北京市龍泉務窯址（北京市文物研究所 2002）などの窯址の発掘・試掘調査が実施され、さらに、従来の資料の再検討も進み、窯の形態・窯道具なども考慮しつつ製作技法についての知識が飛躍的に増大されていく。さらに美術書などで契丹陶磁の総括的な出版物が刊行されるようになった。この段階で、契丹陶磁器の様式編年研究も伸展し、窯址出土品と実年代の明らかな墳墓出土品を組合せ、鶏冠壺などの代表的な器種を中心に、陶磁器の基本的な変遷はほぼ確定した（喬・楊 1993）。この他に、契丹における北宋からの輸入陶磁についても検討が開始され、契丹陶磁器への影響にも触れられるようになる。また、都城や墓址の出土陶磁器の生産地の比定も行われるようになった。

2000年代になると、以上の戦前戦後の成果を受けて、日中双方で、契丹の陶磁器を総括的に考察する論考・著作が現れてくる。中国側の調査成果を受けて、今野春樹は陶磁器編年を試み（今野 2002）、町田吉隆は研究の現状を総括して今後の課題を指摘した（町田 2008）。また彭善国も、戦前・戦後の成果をまとめ、契丹陶磁器の製作技術、編年、輸入陶磁器との関連を考察する著作を発表した（彭 2003）。さらに、新たな成果を取り入れた遼代陶磁器の図録も刊行された（路 2003）。

このように、陶磁器関係の成果は蓄積され、すぐれた成果が挙げられている。ただし、研究開始期から続く傾向であるが、調査・研究の大半は契丹国の中心部である五京周辺地域で行われたものであり、地方での生産や周縁部まで含めた流通網の検討は、行われていない。また、内容は陶磁器主体に限られて、窯業全般に目が向けられているわけではない。そのため、契丹文化の特

徴の一つであり遺跡の帰属の指標にも用いられる陶質土器や、地域生産に大きく関わる瓦生産については、一部を除き本格的な研究が行われていないのが現状である。今後は、地方生産品と広域流通品を併せた全般的な窯業生産研究が必要とされる。

2. 契丹の陶質土器

陶質土器とは無釉の素焼き土器で、多くは細かい素地（泥質）の胎土から、輪積み成形・ロクロ整形され、乾燥後窯で焼成されたもので、灰褐色または青灰色の色調を呈する。日本の須恵器や朝鮮半島の瓦質土器に近い特徴を持つ。特に、胴部に連続して施される型押文・刻文は、契丹土器の特色として知られている。

チントルゴイ1号窯址では、陶磁器の生産は確認できず、無釉の陶質土器のみが出土した。この傾向は1号窯に限ったことではなく、地表で確認できる周辺の他の窯址でも陶質土器・瓦が散布するのみであった。ここでは、什器としては陶質土器のみが生産されていたと考えられる。一方、城内では陶磁器片も採集できるので、陶磁器が使用されていなかったわけではない。他の例を見ると、上京に近接する赤峰市南山窯址では、陶磁器とともに陶質土器も採集でき、ここでは両者が焼成されていたらしい⁽¹⁾。おそらく日常器として用いられることの多い陶質土器は、各地域で生産が行われ、陶磁器は中心地域の工房での生産が主体であったのであろう。つまり、陶質土器と陶磁器の生産・流通には、明らかに違いがあると考えられる。

現在、契丹の領域内で確認されている陶磁器窯址は、都城である五京の周辺に集中している（趙 2003 p.33）。代表的な事例として、赤峰市南山窯址・白音高勒窯址（上京臨潢府）、赤峰市缸瓦窯址（中京大定府周辺）、北京市龍泉務窯址（南京析津府）、遼寧省遼陽市缸官屯窯址（東京遼陽府）、山西省渾源県界庄窯址（西京大同府）などが挙げられる。缸瓦窯址・龍泉務窯址では白磁・三彩（北京市文物研究所 2002）、缸官屯窯址では黒・褐釉磁（三上 1974）、界庄窯では青磁が主体（趙 2003 p.33）など地域的な特色が見られる。

一方、陶質土器については、これまで専用の窯址の調査が行われておらず、その生産についての情報は限られていた。しかし、鳥居龍蔵が指摘したように契丹に関連する都市・墳墓遺跡では、中国・モンゴル領内の両者でこの種の土器が普遍的に出土し、広く生産・流通していたことは早くから予想されていた（鳥居 1914）。また、これらの土器が日常的な使用を目的とした生活什器であるという認識もされていた、しかし、墳墓に副葬される奢侈品も多い施釉陶磁器に比較して、注目度は低く、先行研究も僅かである。

主な研究としては、以下が挙げられる。駒井和愛は、この種の土器が墓誌を持つ契丹墓から出土していることから、これらが契丹の所産であることを確定した（駒井 1942）。また、田村実造は、慶陵の調査結果から、大型の広口壺、小型の壺、大型の鉢の3種の存在を指摘した（田村 1977）。楊晶・喬梁は、陶質土器を含めた陶磁器編年を行った（楊・喬 1993）。ここでは、器形

分類別に編年が行われ、長頸壺・盤口瓜稜壺・罐などの陶質土器が主体となる器形についても時期比定が成されたことは重要である。また、盤口瓜稜壺・罐の生産が契丹国の前半期を中心とすることも指摘している。この年代決定には、墓誌と共伴した墳墓出土資料を用いている。同様な手法で今野春樹も契丹陶磁器の編年を取り組み、土器変遷の傾向を示した（今野 2002）。

しかし、これまでの研究では、本来生産体制が異なる陶質土器と陶磁器をまとめて取り扱い、墳墓出土資料を主体としたため、土器の機能や用途を考慮する視点に欠け、そのため土器組成やその変化などは軽視されており、かつ生活・生産の場での土器様相も明らかにされていない。また、契丹の都市経営における土器生産の役割についても十分に検討されていないといえる。チントルゴイ1号窯址と出土遺物は、生産址と消費地が隣接し、生産時の土器組成、搬入品である陶磁器との関連も明らかにしやすい点で、上記の課題に対応できる資料といえる。

3. チントルゴイ窯址群1号窯址の調査

まず、2008～2010年にかけて調査が行われたチントルゴイ窯址群1号窯址の概況と、その形態的特徴を述べる（千田他 2010）。

チントルゴイ城址は、モンゴル国ブルガン県ダッシンチレン村に所在する契丹国の城郭都市遺跡である。周囲を、高さ3～5mの城壁に囲まれ、南北長約1260m、東西長約660mの規模を持つ、平面長方形の城址である（臼杵 2009）。内部は道路により整然と区画され、綿密に設計された都市空間を持つ。1004（統和22）年に設置された辺防州である鎮州治址とする説が有力である。チントルゴイ窯址群はこの城址の南方約300mに位置し、城址の西から南へ走る旧河道に近い微高地上に位置する。数ヶ所の小規模な隆起が認められ、時期探査の結果でも隆起付近に反応が見られたため、窯址が複数存在する可能性が高まった。2008年に小動物による攪乱で土器片・窯壁片が散布する1基（1号窯址と呼称）の試掘を行い、窯の正確な位置を確認し、2009年に発掘調査を実施した。

この発掘調査では、窯址の西半分を発掘し構造を把握するとともに、遺構の保存を意図して東半分を掘り下げず、発掘後は壁体・床などの遺構を保存しながら埋め戻しを行った。

発掘の結果、以下のような構築と操業の経過が確認された。

窯の形態は半地下式の平窯である。長軸約5.2m、幅約2.6m。天井はアーチ状に積んでいたと思われる、「饅頭窯」の形状をとる。構築は以下の手順で行われた。まず、河川沿いの微高地のやや隆起した個所を選び、その頂部に、深さ約1mの楕円形の土坑を掘り、さらに南側の傾斜部を掘削し急斜面を切り出し煙道・焼成室を設け、さらに焼成室の南側を約1m掘り込んで燃焼室を構築する。長軸は南北方向となる。煙道は1本で、壁と焼成室との仕切りを粘土で構築する。焼成室の北半は日干し煉瓦、焼成室南半と燃焼室は粘土・板石を積み、壁を作る。窯の外壁の南東部では、獣面文軒丸瓦と焼き損じの壺形土器が壁体に埋め込まれていた。焼成室の床に

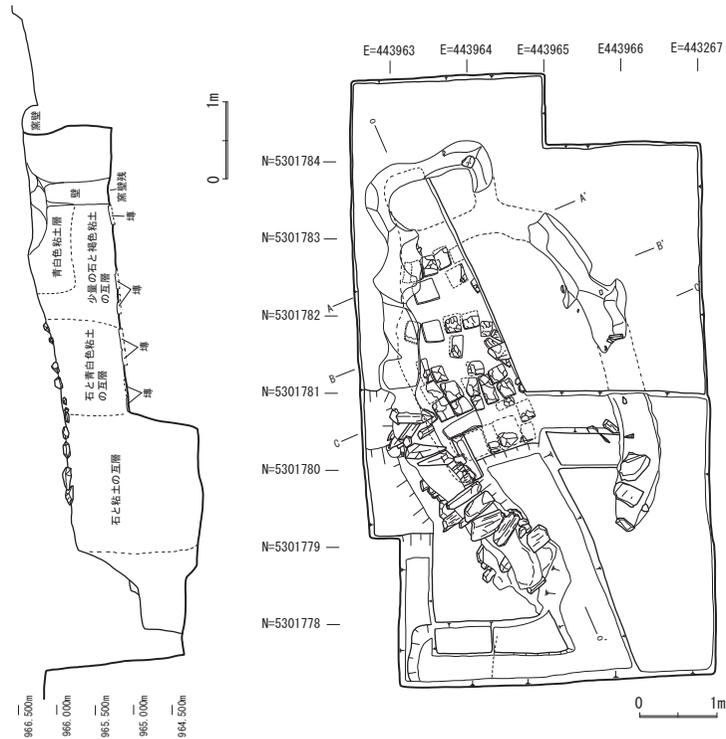
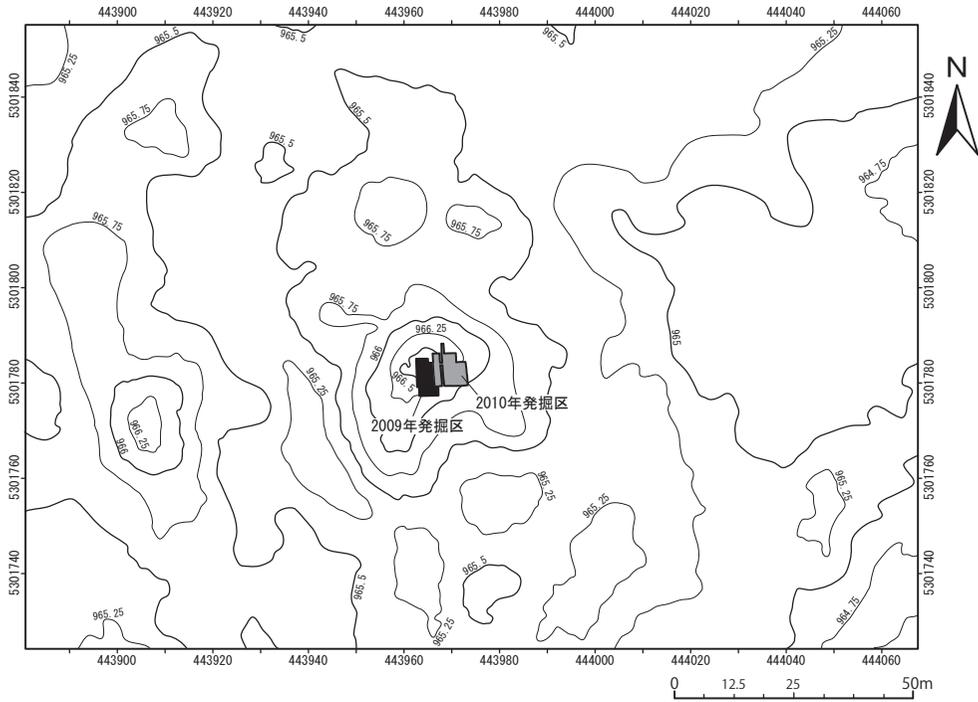


図1 チントルゴイ窠址周辺地形(上)と1号窠址遺構(下)

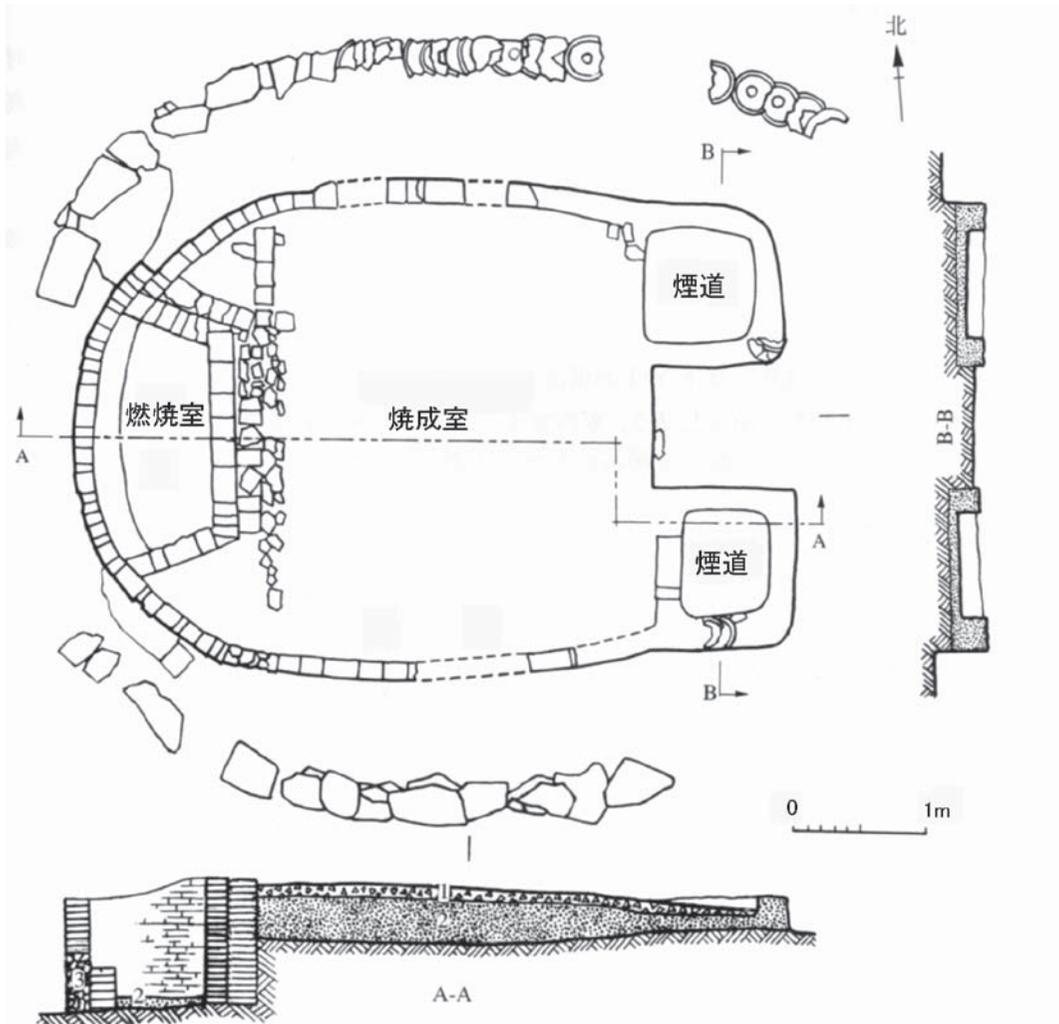


図2 龍泉務Y13窯址（北京市文物研究所2002図六より）

は磚敷を施す。焚口の前面には、作業空間になる方形の前庭部が掘り込まれた。壁の石積みの積み直しと床の拡張が確認でき、1度大きな修理を受けたことが判明した。また、修理後は、灰の掻き出しを行わず、その後10回以上使用されたと思われる。最後の焼成後に、製品が搬出され、その後、埋没したため、内部には壁体破片・製品破片が乱雑に堆積するのみであった。

軒丸瓦・土器の壁体への埋納については、類例はこれまで知られていない。しかし、壺底部と瓦当面の円形を意識して丁寧に設置されていた。また、軒丸瓦に実際に屋根に葺く際の整形が見られ、大型建物で実際に使用されていたらしい。単純な、構築材としての使用ではなく、何らかの祭祀的な意味合いがあった可能性もある。

2010年には、工房址の検出を目的に、窯址の東側を発掘した。工房の検出にはいたらなかった

が、窯の構築に関連すると思われる土坑・地形改変の痕跡を確認し、工場の経営に関する資料を得ることができた。しかし、粘土採掘坑や工房址など窯址遺跡を構成する部分の解明はこれからの課題として残されている。

なお、窯の形状を周辺の事例と比較すると、唐代から続く半地下式の平窯であり、特に平面形が楕円形で煙道が1本である点は、宋代以前の窯に近い(佐川 2009)。一方、主に白磁を焼いていた北京市龍泉務窯址群では、第1期に半地下式と地上式の窯が共存するが、第2期以降、壁体を増積する地上式のみとなり、煙道も複数化する(図2)。平面形は全体は馬蹄形に近く、焼成室は方形に近い形状となる(北京市文物研究所 2002)。陶磁器窯と陶質土器窯を単純に比較はできないが、1号窯址がより古式の様相を残していることは確かであろう。

4. チントルゴイ1号窯址出土土器

(1) 器種と組成

3ヵ年の発掘により、大量の陶質土器・瓦・塼の破片が出土した。破片数では土器が9割以上を占めており、土器の生産が主流であったと考えられる。現在、遺物については整理作業を継続中であり、特に土器については洗浄後に器形のわかるものを選別し、層位・地区別に集計を行っており、土器組成などについてはおおむね把握することができるまで進んでいる。以下では、この整理作業の成果から契丹国の地方土器生産の一端を考察することとし、まず器種分類と組成について述べる。

最初に、器種分類について若干解説しておきたい。なぜなら、器種分類は関連する日本・中国・モンゴル・ロシアの各国間で統一されておらず、また陶磁器研究と一般的な考古学研究の間にも違いがあるため、組成や器種別の変遷を考察する場合に、研究者間に齟齬を生じる場合があるからである。そのため、内容の誤解が生じないようにする必要がある。ちなみに、筆者は、地域や時代を越えた比較検討を行うため、日本の土器分類の基準を用いている。ただし、分類には複数の段階があり、大別や中間の分類には差があるが、最終的な細分においては、名称以外はほとんど差がなく器種が区分されるので、分析・考察の結果に大きな問題は生じないと考える。

日本考古学で用いる器種分類に従えば、チントルゴイ1号窯址で出土した土器の器種は、壺類、鉢、甕、羽釜、深鉢、碗、甗、蓋に大別される。壺・鉢・甕類には、粒子の細かい中国でいう泥質の胎土を用い、色調は灰色・青灰色のものがほとんどである。中国考古学では灰陶と呼ばれる種類のものである。一方、羽釜・深鉢はやや粒子が粗く、砂粒などの混入も多い。中国考古学では夾砂陶と呼ばれる。色調が赤褐色のものが多。このうち、壺・鉢・甕・深鉢については、先に述べたように国・研究分野による用語・分類基準の違いが大きいため、まずそれぞれの本稿での定義を述べておく。

壺類とは、胴部上半が半球状にせばまり、胴部最大径と頸部下端径の差が顕著になる器形をい

う。中国考古学・陶磁器研究でもちいる、「瓶」・「壺」・「罐」の一部を併せたものである。中国考古学では、長頸壺のうち特に頸部下端が特に狭くなるものは長頸「瓶」、短頸壺・無頸壺は「罐」と呼ばれる。

甕類としたのは、胴部上半があまり狭まらず、短い頸部と広い口縁部を持つ容器である。口縁部径と胴部最大径の比が最小でも1：2程度である。また、器高は口径よりも長く縦長である。大型のものが多い。中国考古学では「罐」、陶磁器研究では「壺」に分類されることが多い。また、日本の弥生時代研究においては、「甕」は煮沸容器の分類に用いるが、本稿ではむしろ大型の貯蔵容器に用いた。

鉢としたのは、最大径を口縁部に持ち、器高が口径より小さい比較的大型の容器である。同様な形状の小型品は「碗」と分類した。

深鉢としたのは、広口の筒形に近い形状で、器高30cm以下の中型品で、頸部と胴部は明確に区分されない。日本の弥生時代研究での「甕」に近い。中国考古学では「罐」に分類されることが多い。

次に以上の大別した器種をさらに細分する。

壺 類（図3-1～40） 壺類はさらに長頸・短頸・無頸に細分される。長頸壺は、頸部が長く伸び、ラッパ状に高く外反するもので、器高が30cm程度となる比較的大型のものも多い（1～20）。また、胴部も細長くなるものが多い。陶磁器では「長頸瓶」・「長頸壺」と呼ばれるものに近い器形である。ただし、「瓶」は「壺」よりも頸部が細くなる器形であるが、1号窯址では特に頸部が細くなるものは少なく、ほとんどが陶磁器の「壺」に分類できる。頸部中に突帯文を持つものがある。

短頸壺は、短い頸部を持つもので、口縁がラッパ状に開く短頸壺a、直立する短頸壺b（34）、中間に段を作る盤口壺（24・25）、肩部が段をなすように強く屈曲する折肩壺がある（30）。一部に蓋を置くためと思われる受け部を作るものもある（27・28）。胴部は球状にふくらむものが多い。

無頸壺（35・36）は、明瞭な頸部が無く胴部上端に口縁部が作られるもので、口縁を丸く仕上げたものが多い。器高が口径より低いものは、日本で仏具に用いる「仏鉢」に近い器形である。また、小数ではあるが、口縁付近に注口が付くものがあり、片口のような用途が考えられる。

壺類には、胴部に歯車状工具の型押文や連続させた短刻文を数段施すものも多く、これが契丹陶質土器の特徴とされている。頸部や胴部に暗文で波状文・縦の連続帯状文・格子目文などを施すものも多い。また、三角形の型押文を水平に連続させるものもある。

鉢 類（図4-1～14） 最大径を口縁部に持ち、器壁は底部から斜めに立ち上がり、口縁径が器高より長い比較的小さい容器である。陶磁器では口縁を、端部近くで若干内反させ、その後は外に折り曲げて作る鉢aが多い。別に粘土帯を貼付け口縁を作るものも。またこの中に横向きの橋状把手を持つものがみられる（14）。口縁下に突帯を貼付け有段口縁とし、半球状の胴部を持つ鉢b（9・11）、器壁を口縁近くで若干内湾させ、その後外側に折り曲げて口縁部を作り、胴部に最大径を持つ

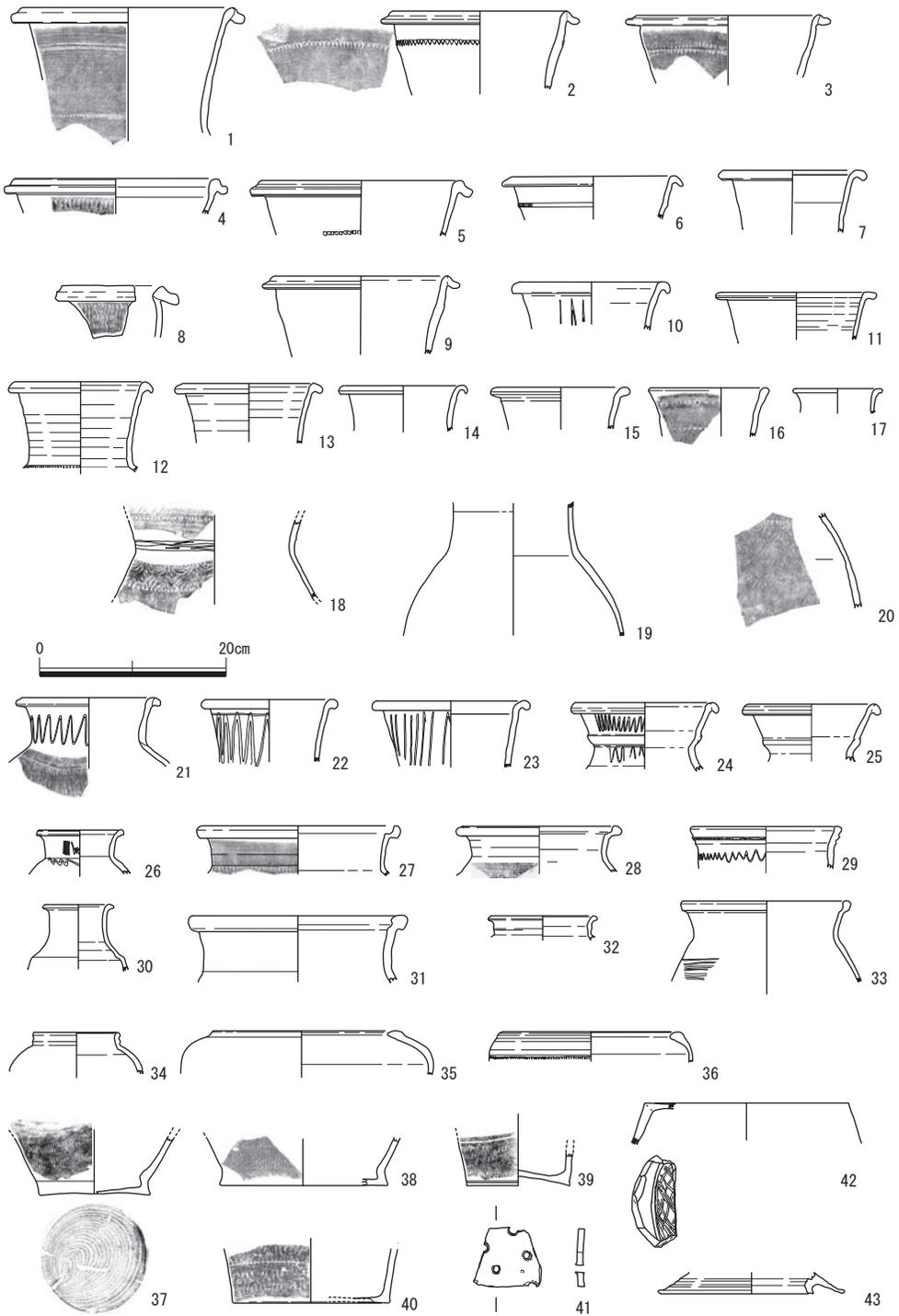


図3 1号窯址出土土器（壺類・甑・蓋）
 1～20：長頸壺, 21～34：短頸壺, 35・36：無頸壺, 41：甑, 42・43：蓋

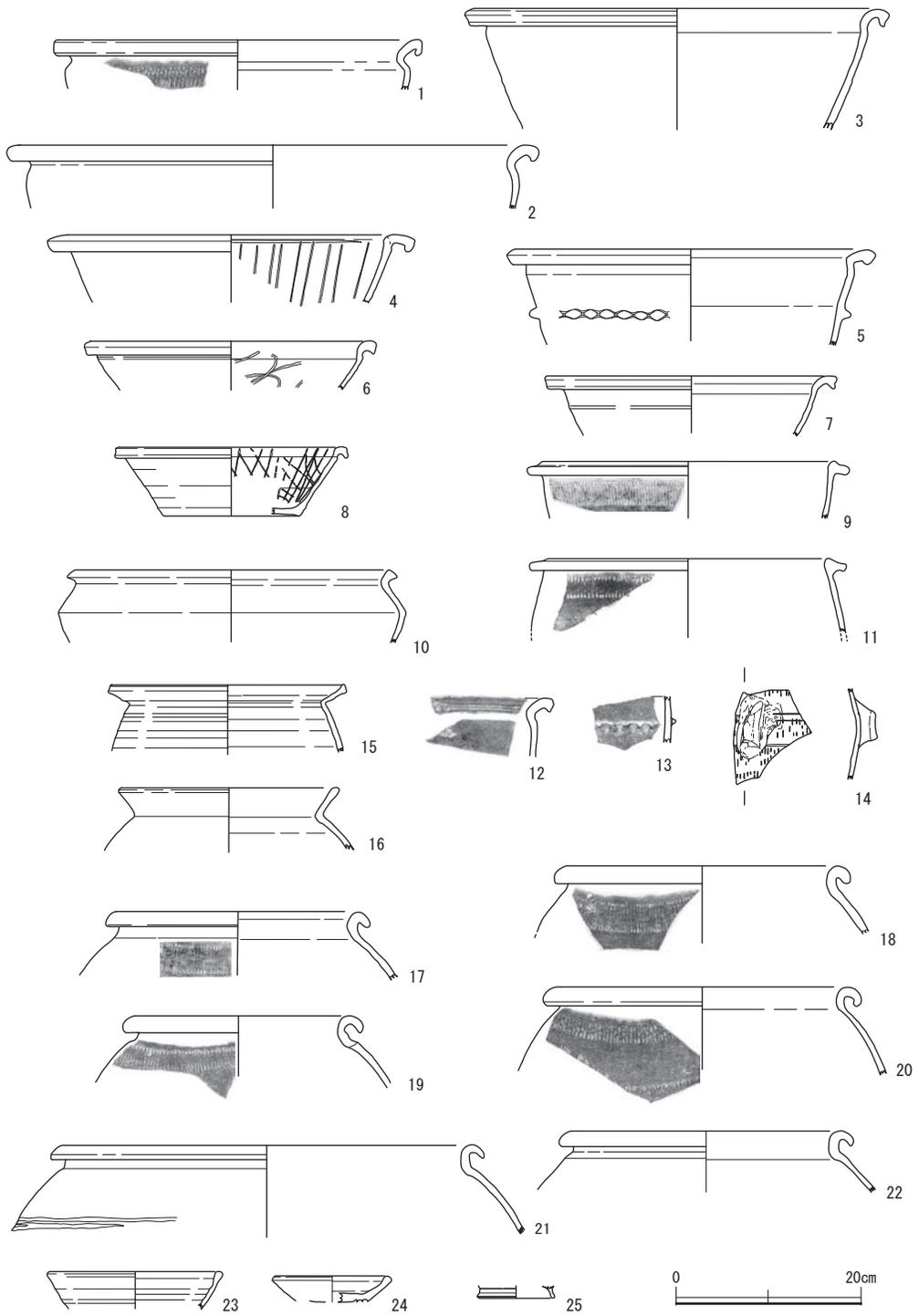


図4 1号窯址出土土器（鉢・甕・碗・皿）
 1～14：鉢,15～22：甕,23～25：碗・皿

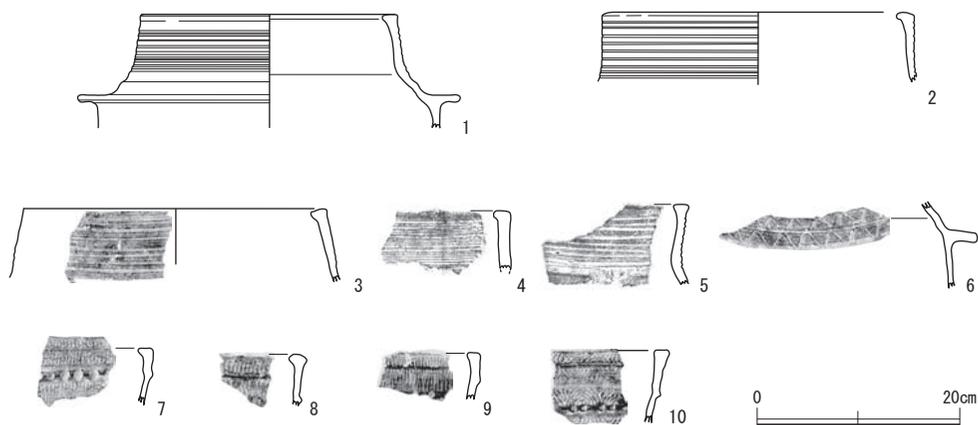


図5 1号窯址出土土器（羽窯・深鉢）
1～6：羽窯,7～10：深鉢

鉢c (10)がある。文様には胴部外面の突帯文や連続する型押文・刻文、内面の暗文がある。

甕類 (図4-15～22) 短い頸部と肩のはった比較的大型の容器である。最大径は胴上半部にある。頸部をくの字状に屈曲させる甕a (15・16)、口縁を折り曲げて短い頸部を作る甕b (17～22)がある。甕aにはおそらく長胴のいわゆる鶏腿瓶（長壺）と同様な形状のものがある。

羽釜 (図5-1～6) カマドの穴に設置するための鏝状の突起を胴部にめぐらす容器である。ほぼ全てのものに3本の脚が付く。出土品は、ほぼすべて同じ形状をとる。半球状の胴部の上端に、板状の鏝をめぐらし、頸部はやや内反した後直立する。頸部外面に平行に沈線文を複数条施す。胴部下半の3ヶ所に脚を取り付ける。総じて文様は少ないが、鏝にジグザグ文を施すもの(6)もある。

深鉢 (図5-7～10) 胴部上半で若干内湾するものの、全体としては筒形の形状で、口縁下外面に幅数cmの粘土帯を貼付ける、あるいは口縁部の粘土帯を下の粘土帯とずらして接合し有段に作るものが多い。外面には櫛目型押文ないしは刻文を連続させる。また、細い突帯文を持つものもある。

その他 その他の器種は出土点数が少なく、分類できるほどではないので、出土したものの特徴を述べておく。碗は高台付の陶磁器の碗に近く、半球状の胴部を持つ (図4-23)。また浅い皿がある (図4-24)。両者は底部を内側に押し上げているものが多いが、高台を作りつけたものもあるらしい (図4-25)。また、蓋は、皿状の平たいもの (図3-42) とかえりを持つ半球状のものが見られる (図3-43)。平たい蓋は、上面に暗文などを施すことが多い。甑は底部の破片のみが出土し、形状の判断がつかないが、破片の大きさから底径が大きいことは確かで、鉢aに類似した器形である可能性がある (図3-41)。

チントルゴイ1号窯址で出土した主な器種は以上の通りである。口縁部・胴部上面など器種判

別ができる破片数による現時点での集計では、壺類が約4割程度ともっとも多く、鉢類がそれについて2割程度を占める。残りを甕類・羽釜・深鉢で構成し、これ以外の器種はごく少数である。窯址の出土層による組成の差は顕著ではなく、各時期で同程度の構成であったと思われる。羽釜・深鉢は、形状や胎土から煮沸具と考えられる。全体における割合は大きくはないが、一定数の生産が継続して行われていたことが分かる。この種の土器が、他の陶質土器と同じ窯で生産されていたことが判明したことは、注目される。

次に、陶磁器の器種との比較をしておく。まず、もっとも生産量が多い壺類は、食膳具・貯蔵具・調度品など用途が多様であるが、陶磁器に見られる鶏冠壺、鳳首壺、穿帯壺注壺方形盤などの装飾性が強い器種は出土していない。また、上記のように「瓶」と分類できるものも稀である。ただし、ここでみられる器形は陶磁器のものとも共通している。鉢類では鉢a・bともに陶磁器には見られない。陶磁器の鉢は、碗類に近い半球状の胴部を持つものや、口縁部が若干内湾する形態のものとなる。甕類については、甕bに、長壺など近い形状のものがある。羽釜・深鉢は同様のものは陶磁器には見られず、陶質土器に特有の器種となる。さらに、陶磁器に見られる、蓋托、皿（盤）類、硯、唾壺などの器種は存在しない。

なお、円盤状の土板に円孔を3ヶ所あけるとされる用途不明品が出土しているが、エンフトルは、壺の重ね焼きに用いる窯道具になることを想定しており、今後、類例の確認をしていく必要がある（Енхтөр *et al* 2011）。

以上のように、チントルゴイ1号窯址で生産された器種は、壺類・鉢類・甕類という貯蔵容器が主体であり、それに羽釜・深鉢のような煮沸具が加わる。一方、碗・皿類などの食膳具は少ない。また、調度品とされるような多様な装飾的器種は生産されておらず、比較的単純な組成である。これは、陶質土器生産は日常的な容器を主な対象としていたためと考えられる。

なお、1号窯址出土器の中には、盤口壺・深鉢・折肩壺など契丹国の前期段階に多いとされる器形が多い。また、突帯付き長頸壺の形状も、突帯の位置が口縁に近く契丹前期の特徴を持つといえる（楊・喬 1993、今野 2002、彭 2003 p.194-207）。実年代については各研究者によって差があるものの、前期の年代はおおむね10世紀代あるいは六代皇帝聖宗の統和（983～1012）年間ころまでとされている。鎮州の設置が1004年であるので、この窯が築造されたのは建城からさほど時間が立っていない時期と考えられる。ただし、焼き損じや使用された瓦が壁体に埋納されているので、操業開始から若干の時間はたっているであろう。それでも、土器組成から見て11世紀前半中に操業が開始されたと見てよいだろう。

また、各器種の時期的な形状の変化については、1号窯址の層位内では特に顕著ではない。これは、窯の使用が器形の大きな変化が生じるほど長期間にはわたっていないためである可能性がある。一方で、使用回数が10回以上にわたっているため、短期間に集中的に焼成を繰り返したものであると思われる。

以上より、1号窯址の出土資料は、契丹前期末から中期初めころ、おおむね11世紀前半ころの

一括資料とできる可能性がある。ただし、窯1基のみの資料であり、層別の検討もより詳細に進め、さらに別の窯の資料などを明らかにした段階で、再度比較検討したいと考える。

(2) 生活址との比較

では、チントルゴイ城内の生活の場でも、1号窯址の器種組成と同様の傾向が認められるのであろうか。チントルゴイ城址では、発見後長らく本格的な調査が行われなかったが、2000年から2003年にモンゴル調査隊により発掘調査が行われ、2005年にその成果が刊行された（*Очир et al* 2005）。その後2004年から2008年まで、ロシア・モンゴルの共同発掘調査が行われた。2011年にその報告が刊行され、発掘の内容が公開された（*Крадин (ред)* 2011 p.65-118）。発掘調査は、北城の中央部、南門から延びる南北道路と東西門をつなぐ東西道路との交差点の西南の区画で行われた。ここでは数時期の生活面に、家屋群・貯蔵穴などが検出され、この地点が居住区域であることが判明した。家屋自体も特に大規模な建物ではなく、近接して複数の建物が建てられていることから一般的な居住区と考えられる。遺構内外から大量の土器が出土し、生活空間における土器様相を示す好資料となっている。さらに南城西門の周辺でも発掘が行われ、住居が検出され

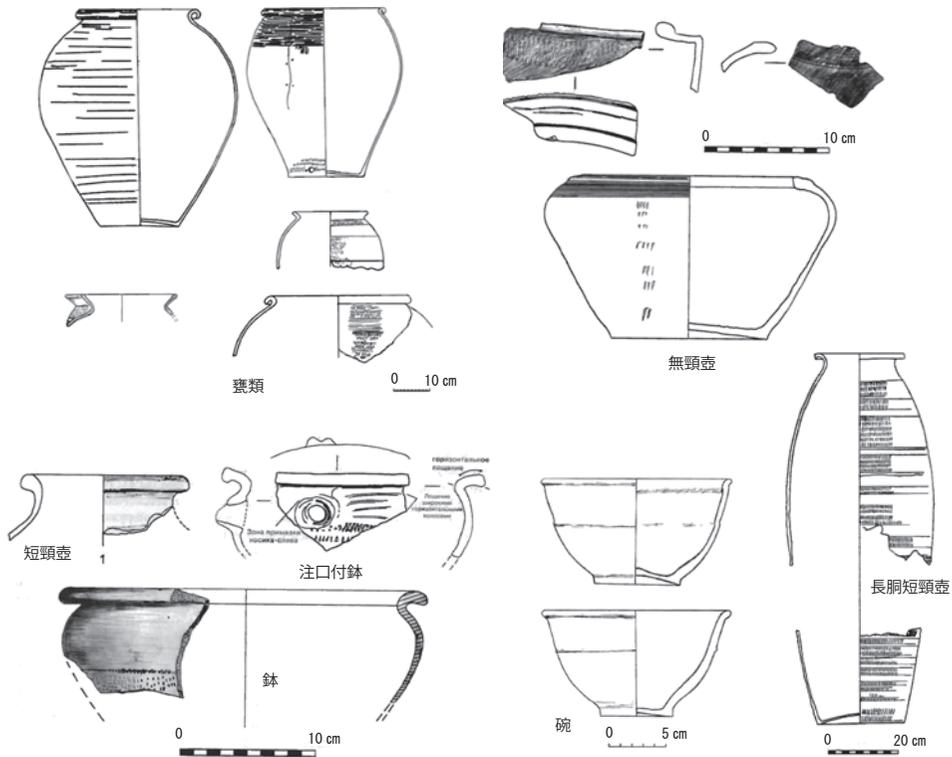


図6 城内居住区出土土器（ロシア・モンゴル共同調査隊発掘）
Крадин (ред) 2011 рис 64・72・77・104 より

ている。以下では、このロシア・モンゴル共同調査の資料の概要を述べ、窯址出土資料との比較を行う。

報告では、出土土器について、層位・遺構別に記述されていないため、時期区分を行うのは難しいが、全体的な傾向は把握できる。全体の器種構成は、1号窯址よりも多様な様相を呈している。

出土器種は、壺類、甕類、鉢類、羽釜、深鉢が主体であるが、さらに碗類・蓋が比較的多く出土している（図6）。また、用途不明であるが長脚の透かし付き器台が見られる。

甕類の大型品は、地面に埋められた状態で出土するものが多く、内部から炭化穀物や動物骨が出土することが多く、食品の貯蔵用に使われる場合が多かったらしい。また、甕の底部付近に焼成前に開けられた穴を持つものがある。壺には、陶磁器にも見られる長胴の短頸壺が見られる。鉢類には、注口を持つものがあり、鉢と広口の短頸壺は機能的にはほぼ同じものと捉えられていたようである。碗類には陶磁器と同様な、底部径が小さく胴部が半球状になり口縁部は丸く仕上げるものと、底径が比較的大きく須恵器の杯に近い形状のものがある。底部は高台状になっているが、高台を貼付けたものではなく、底部の糸切り後に底部中心をやや内側に押し上げて凹状にしているらしい。

次に城内における陶磁器の構成とも比較してみたい。城内で地表採集できる陶磁器片は、白磁が主体でありほとんどが碗類と考えられる。また、黒釉、緑釉陶磁器片も若干採集できるが、比較的厚い破片が多く、大型の壺などが存在したらしい。このような状況は、ロシア・モンゴル隊の調査区でも同様である（Крадин (ред) 2011 p.120-128）。出土した破片は236点のみで、大量に出土した陶質土器片と比べると僅かな量である。ほとんどが白磁であるが、黒釉磁、青白磁、青磁も若干見られる。器種は碗が主体であり輪花碗や刻花文を持つものが数点ある。底部には輪高台の他に、蛇の目高台も見られる。碗類に次ぐのが長胴の壺類であり、皿・注壺が少数存在する。

以上のように、発掘地点の器種構成を1号窯址と比較してみると、特に大きな差はないが、碗類については違いが顕著で、陶質土器でも比較的生産量が高かったことがわかる。また、器台などの特殊な土器の生産も行われていた。以上の差が偶然によるものか、生産時の事情を反映したものかを明らかにするために、今後資料をさらに詳細に検討していく必要がある。少なくとも特殊土器については、器種不明の破片中に含まれている可能性もある。また、碗類の生産については、同時に他の窯の調査も視野に入れて、再検討する必要があるだろう。

一方、陶質土器と異なり陶磁器の組成は碗類が主体であり、ついで壺類となる。これは、陶質土器と陶磁器とが主要器種を変えながら、互いを補完しているといえないこともないが、留意すべきなのは圧倒的な量の差である。碗類にしても、生活の場では陶質土器の数量が陶磁器を圧倒していたと思われる。つまり基本的には、陶質土器が日常什器として用いられ、陶磁器はその一部をにない、若干の奢侈品も含まれていたというのが実態であろう。今回対象としたのは、一般的な住居であり、居住者も特別な階層に属したとは考えにくい。今後は、大型建物集中区など他の地点における陶磁器・陶質土器の比率なども、検討しながら、実態を解明していく必要がある

う。また、碗類が主体となる理由については、陶磁器自体の生産・需要などを考慮する必要がある。

5. 陶質土器生産の系譜

(1) 遊牧社会伝統の系譜

陶質土器生産が北アジアの遊牧系集団において開始されるのは、匈奴時代にさかのぼる。これは、漢式土器の影響下に開始されたと考えられるが、その後の鮮卑・突厥・ウイグルなどの遊牧集団においても、その生産は継続された。契丹の陶質土器生産は、その系譜の中にどのように位置づけることが可能であろうか。

匈奴期の陶質土器については、ザバイカルに存在するイヴォルガ土城の出土例から知ることができる(Давыдова 1995 p.24-28)。ここでは、51基の住居址と多数の貯蔵穴に加え、土器焼成遺構も検出され、土器が在地の生産であることが判明している。土器組成は、壺、甕、鉢、深鉢が主体である。また、土器文様には、暗文が多用され、特に頸部に縦に連続させることが多い。また、波状の沈線文・貼付文を肩部に施す例も多い。以上の特徴は、契丹のものと同通しており、匈奴からの伝統を継承したものと考えられる。もちろん数百年のブランクが両者の間にはあるが、匈奴後にモンゴル高原を支配した鮮卑系集団にも、匈奴土器の特徴を持つ壺形土器が引き継がれており、その年代の下限は南北朝期とされている(臼杵 2004 p.158-168, 金田 2009)。契丹の根拠地であるシラムレン川流域は鮮卑系集団の居住地でもあったので、この伝統は鮮卑系集団から契丹に継承されたものであろう。

匈奴の領域は北アジアステップ地域のかかなりの部分を占めていたため、匈奴の影響も広範囲に広がった。鮮卑・契丹の領域は匈奴の領域の東側に当たるが、西側でも同様に匈奴の影響を受けた陶質土器の生産が行われている。アルタイ地域では実際に、匈奴の土器焼成窯址が発見されており(Кубарев・Журавлева 1986)、周辺のトゥーバや南シベリアでも、鮮卑と同時期の、暗文を多用する陶質土器の壺が多数発見されている(Худьяков 1989 p.140-145)。そして、8世紀のウイグル可汗国においても同様な陶質土器の生産が行われていた。ウイグルの都であるハルバルガスにおいては、大量の陶質土器が採集され、その特徴も把握されている(Худьяков 1989 p.145-147)。最も特徴的とされるのは、方形・半円形などの幾何学的な意匠の型押文や波状文である。

チントルゴイ城址では、ウイグル土器に類似する型押文を持つ土器片が出土しており、モンゴル隊の単独調査時期にすでに注目されていた(Очир *et al* 2005 p.121)。それは、チントルゴイ城址が契丹の鎮州治址と考えられているためである。『遼史』地理志には鎮州について「本古可敦城」との記載があり、本来ウイグルの后妃である可敦の居城として造営されたものを改修したとするのが一般的である。そのため、このような土器が可敦城の存在を証明すると期待され、契丹時代の下層にウイグル可敦城期の遺構が存在すると想定されたわけである。

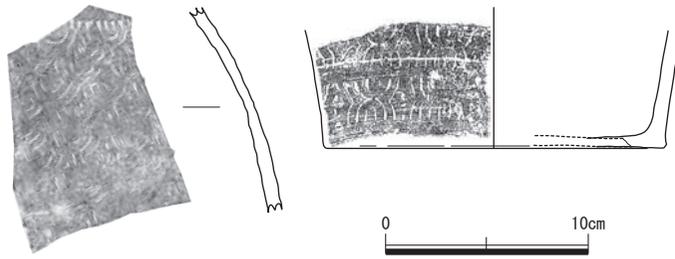


図7 ウイグル系文様土器（壺）

しかし、ロ・モ共同調査やその後の日本・モンゴル隊による調査においても、契丹以前の層やウイグル可汗国期の遺構は検出されていない。また、ウイグル的な文様と、契丹の文様が混在する土器も存在し、このような文様を持つ土器も契丹時代に生産されたことが明らかになってきた（Крадин (ред) 2011 p.116-118）。

チントルゴイ1号窯址でも、ウイグル文様を持つ土器片が一定数出土し、やはり典型的な契丹土器（壺、深鉢など）に施され、かつ契丹の文様と同時に用いられている例も見られ、ロ・モ共同調査の成果を追認することができた（図7）。また、このような土器が地域で生産されたことを確認できたのは重要である。この種の文様は、契丹の領域内の他地域では確認されておらず、チントルゴイ周辺の地域的な特徴である。つまり、土器生産においてウイグルの系譜を引く地域的な伝統が取り込まれたことを示しており、建城後の窯業経営においてウイグル系の工人集団を取り込んだと思われ、それが在地の集団である可能性もある。

問題は、そのような集団が、チントルゴイ城址周辺に、当時居住していたかという点である。これについては、最近の発掘調査が示唆を与えてくれる。チントルゴイ城址が存在するトーラ川の流域は、唐代にはウイグル系の集団の居住地であったことが最近の調査で確かめられつつある。チントルゴイ城址から東に約20kmに位置する同時期のオランヘレム城址周辺には、唐代の墓地が集中している。それらの発掘では唐風の地下式墓が発見され、墓道の壁画や墓誌などが出土している。発見された墓誌の一つには、埋葬者が初唐期に唐に臣属していたウイグル系集団の長であることが記載されており、周辺がウイグル系集団の領域であったことを示している⁽²⁾。もちろん、その後の突厥第2可汗国やウイグル可汗国の盛衰により、大きな社会変動が生じたと思われる、在地の住民がそのまま居住し続けたのかは不明である。ただし、ウイグル帝国期にも、その拠点のひとつが、この周辺に置かれていた可能性がある。それは、オランヘレム城址からさらに約20km西のトーラ川沿い立地するヘルメンデンジ城址である。この城址は契丹時代にも使用されており、城内からは契丹の土器が出土する。しかし、築城の時期はそれをさかのぼる可能性があり、城壁の構造や門の形態にウイグル可汗国の都ハルバルガスのもものと共通点がある。現在、ロシア・モンゴル共同調査隊により発掘調査が継続されており、契丹以前の文化層も確認されらしい⁽³⁾。もし、それが確実であるならば、鎮州設置ころにもウイグル系集団の居住が続いて

いた可能性は高くなり、「本古可敦城」の記述の要因となったことは考えうる。

この予想が正しいならば、辺防州の設置にあたり、在地住民をも積極的に取り入れ、経営を営ったことを示す資料となり、契丹の都市建設と生産体制の様相の一端を示すことになろう。ヘルメンデンジ城址などの調査成果を待って、あらためて考察したい。しかし、すくなくとも別の遊牧集団の土器製作伝統が契丹の土器生産に導入されたことは間違いない。

(2) 渤海・女真の系譜

一方、1号窯址出土資料には、さらに別の土器伝統を示す資料も存在する。それが、橋状把手付きの鉢である。この形状の把手は、遊牧社会の土器製作伝統の中には存在せず、契丹土器においても一般的な器形ではない。この器形はむしろ渤海の陶質土器において一般的であり、特に牡丹江流域では8世紀ころから見られる(木山 2007 p.52)。この橋状把手は高句麗土器の壺形土器からの伝統を引き継いだものと考えられ、高句麗の影響が強かった第2松花江流域では渤海の直前期から出現している(木山 2007 p.58)。

契丹侵攻による渤海滅亡後東丹国が置かれ、かつ多くの渤海人が契丹領内に移住させられることとなる。やはり契丹領内に遷された漢人と渤海人を主体に各地で州県の設置が行われた(田村 1964 p.273-313)。その際に、渤海の文化も契丹にもたらされたと考えられており、例えば様々な生産活動にも従事していた。太祖耶律阿保機の陵墓である祖陵を守る奉陵邑祖州城、遼陽城、饒州城など渤海遺民の移住が記録されている城市では、渤海の意匠を持つ瓦が出土しており、渤海人が生産に従事したと考えられている(島田 1993 p.140, 向井 2011)。

『遼史』地理志には鎮州において「渤海 女直 漢人配流之家七百餘戸」が存在したことが記載されている。1号窯址出土土器の渤海的要素は、移住させられた渤海人たちが実際に土器生産にも従事していたことを示す資料であると考えられる。同様な傾向は、ロ・モ共同調査隊の出土資料でも確認されており、やはり渤海人の関与が想定されている。窯址と城内調査双方の資料を併せることで、この見解の確実さは高まったといえる(Крадин (ред) 2011 p.116-118)。

以上の点から、契丹の都市建設とそれにとまなう生産基盤の設置には、様々な集団が関わっていたことが明らかになり、ハイブリッド的な生産体制が築かれたことが分かる。瓦生産においても、渤海の技術や知識がそのまま再現されるのではなく、華北系工人とともに生産に関わっていたと考えられている(向井 2011)。特に、領域の西北辺における新たな州城の設置における生産基盤の整備には、渤海系工人とともに在地集団も大きく関わっていた可能性が高くなり、契丹の地方統治の実態を示す資料であるといえる。

おわりに

本稿では、主に窯址出土陶質土器と城内出土土器の器種組成から、窯址の年代とチントルゴイ城址における土器生産の実態を考察し、さらに陶磁器との関係などから、それらが日常容器の需要を満たすことを主たる目的にしていたと推定した。また、土器の文様や器種などの特徴から、そこに複数の遊牧文化の伝統や、渤海土器の伝統が継承されていることを明らかにした。

現在、まだ出土土器全ての整理が終了していないため、組成等に今回の結論とは異なる部分が生ずる可能性もあるが、全体的な傾向は大きく変わらないものと考えている。また、土器生産の実態の解明には、城内・窯址・工房址などのさらなる調査が必要であることを、あらためて確認した。また、今回は土器のみを扱ったが、同時に行われた瓦生産にも分析を行う必要がある。他にも陶磁器生産との比較や、周辺城址との比較検討など残された課題が多い。今後も、調査を継続しながら一つ一つ課題に取り組んでいきたいと考える。

本稿の執筆にあたり、チントルゴイ城址・窯址群の調査をともにしている千田嘉博氏、A. エンフトゥル氏、佐川正敏氏、木山克彦氏から多くのご教示をいただいた。また、ロシア・モンゴル調査隊を主導しているN. クラージン氏からも多くの情報とご教示をいただくことができた。さらに、資料・図面の整理に田口美香氏にご協力いただいた。皆様のご助力に感謝申し上げます。

また、前学長の布施晶子先生には、筆者の本学着任後、大学での活動において様々な助言とご助力をいただいた。残念ながら、もう直接御礼を申し上げることが出来ないが、あらためて御恩にお礼申し上げますとともに、ご冥福をお祈りする。

本稿は、2010年度札幌学院大学研究促進奨励金（課題番号SGU-S10-202002-03）「モンゴルにおける中世陶質土器の型式学的研究」による成果である。

注

- (1) 南山窯址は白・緑・黄色釉の磁器生産地として知られているが（田村 1977）、無釉陶質土器の生産も行っており（今野 2001）、現地では陶質土器片が採集できる。
- (2) 2010年1月に、ウランバートル市のザナバザル美術館で墓誌・木俑などの出土品を実見することができた。調査者による正式な報告がなされていないため、詳細を述べることはさげたい。
- (3) クラージン氏から、調査の様子についてご教示いただいた際の情報であるが、調査継続段階の予想であり、確実なものではない。少なくとも複数の文化層はあるということであろう。最終的な報告が、公表されるのを待ちたい。

参考文献

（邦文）

- 今野春樹 2001 「遼の窯址」『博望』第2号 50-57頁 東北アジア古文化研究所
 今野春樹 2002 「遼代契丹墓出土陶器の研究」『物質文化』第72号 21-42頁
 白杵 勲 2009 「モンゴルブルガン県チントルゴイ城址の検討」『物質文化史学論聚』 267-282頁 北海道出版企画センター

- 白杵 勲・A. エンフトゥル 2009 『チントルゴイ城址の研究1』 札幌学院大学総合研究所
- 金田明大 2009 「三燕の土器・陶器」『北方民族のかがやき 三燕文化の考古新発見』 56-58頁 奈良文化財研究所 飛鳥資料館
- 木山克彦 2007 「渤海土器の編年と地域差について」『北方圏の考古学Ⅰ』 47-61頁 北海道大学大学院文学研究科
- 駒井和愛 1936 「遼代の素焼土器について」『東洋史会紀要』1 (駒井1977所収)
- 駒井和愛 1977 『中国都城・渤海研究』 雄山閣
- 小山富士夫 1944 『満蒙の古陶磁器』 満州古跡保存協会
- 小山富士夫 1970 『中国陶磁(上)』 出光博物館 (小山1977所収)
- 小山富士夫 1977 『小山富士夫著作集(上) 中国の陶磁』朝日新聞社
- 佐川正敏 2009 「東アジアにおける仙台市与兵衛沼窯跡の位置づけ 瓦工房調査の基礎知識と平窯の起源・系譜を中心に」『アジア文化史研究』第9号 1-18頁 東北学院大学大学院文学研究科
- 島田正郎 1955 『祖州城』 中澤印刷株式会社
- 島田正郎 1997 『契丹国 遊牧の民キタイの王朝』 東方書店
- 白石典之 2002 『モンゴル帝国史の考古学的研究』 同成社
- 千田嘉博・A. エンフトゥル・佐川正敏・白杵勲 2010 「モンゴル中世窯業生産の解明」『日本考古学協会第76回総会 研究発表要旨』 28-29頁 日本考古学協会
- 関野 貞・竹島卓一 1943 『遼金時代の建築と其仏像』 東方文化学院
- 田村実造 1964 『中国征服王朝の研究(上)』 東洋史研究会
- 田村実造 1977 『慶陵の壁画』 同朋舎
- 田村実造・小林行雄 1953 『慶陵 I』 座右宝刊行会
- 鳥居龍造 1914 『考古学民族学研究・東蒙古の原住民』 東京帝国大学 (鳥居1976a所収)
- 鳥居龍蔵 1937 『遼の文化を探る』 章華社 (鳥居1976b所収)
- 鳥居龍蔵 1976a 『鳥居龍蔵全集 第五巻』 朝日新聞社
- 鳥居龍蔵 1976b 『鳥居龍蔵全集 第六巻』 朝日新聞社
- 町田吉隆 2008 「契丹国(遼朝)の陶磁窯とその特色」『契丹陶磁-遼代陶磁の資料と研究』 朋友書店
- 三上次男 1974 「赤峰缸官屯窯とその性格」『東洋陶磁』vol.2 東洋陶磁学会(三上1989所収)
- 三上次男 1981a 「渤海・遼・金・元の陶磁器生産とその背景」『世界陶磁全集』13 131-142頁 小学館 (三上1989所収)
- 三上次男 1981b 「渤海・遼の陶磁」『世界陶磁全集』13 143-169頁 小学館 (三上1989所収)
- 三上次男 1989 『三上次男著作集4 中国陶磁史研究』 中央公論美術出版
- 向井祐介 2011 「契丹の徙民政策と渤海系瓦当」『遼文化・慶陵一帯調査報告書2011』63-85頁 京都大学大学院文学研究科
- 八木奨三郎 1928 『満州考古学』 岡書院
- 弓場紀知 2000 「遼上京府林東窯址の再検討 1944年の小山富士夫の調査」『出光美術館研究紀要』 115-146頁
- 弓場紀知 1998 「遼の陶磁」『世界美術大全集東洋編第5巻 五代・北宋・遼・西夏』 237-242頁 小学館
- (中文)
- 北京市文物研究所 2002 『北京龍泉務窯発掘報告』
- 馮永謙 1984 「赤峰缸瓦窯遼代窯址の考古新発見」『中国窯址調査報告集』 386-392頁 文物出版社
- 馮先銘 1984 「山西渾源古窯址調査」『中国窯址調査報告集』 416-421頁 文物出版社
- 彭 善国 2003 『遼代陶磁的考古学研究』 吉林大学出版社
- 楊 晶・喬 梁 1993 「遼陶磁的分期研究」『青果集 吉林大学考古專業成立二十周年考古論文集』 382-390頁 知識出版社
- 路 青 2003 『遼代陶磁』 遼寧画報出版社
- 李文信 1958 「遼盜簡述」『文物參考資料』1958-2 10-22頁

(ロシア文)

- Давыдова, А.В. 1995 “Иволгинский археологический комплекс том1”, Санктпетербургский фонд “Азиат ИКА”, Санктпетербург
- Крадин, Н.Н.(ред) 2011 “Киданьский город Читолгой-балгас”, р.134-152 Издательская фирма «Восточная литература», Москва
- Кубарьев, В.Д., А.Д.Журавлева 1986 Керамическое производство хуннов Алтая, “Палеоэкономика Сибири”, р.111-119, Наука сивирское отделение, Новосибирск
- Худьяков, Ю.С. 1989 К истории гончарной керамики в южной Сибири и центральной Азии, “Керамика как исторический источник”, р.134-152, Наука сивирское отделение, Новосибирск

(モンゴル文)

- Очир, А., А.Энхтөр, Л.Эрденеболд 2005 “Хар бух балгас ба туул голын сав дахь Хятаны уеийн хог суурингууд”, Улаанбаатар
- Энхтөр, А., И.Усуги, Ё.Сэнда, М.Сагава, Г.Батболд, Ц.Буянхишиг, Д.Отгон 2011 Читолгойн балгасны ваар сав шатаах зуухны малтага судалгааны урьдчилсан үр дүн, “Археологийн судлал” omus XXX, Улаанбаатар

Local earthenware production in Kitai Empire

Isao USUKI

Abstract

This paper intends to clarify the actual condition of local earthenware production in Kitai Empire. The earthenware production of Kitai Empire can be classified into the wide range circulation type and the local limitation type. The former is represented by the china and porcelain production, and the latter is represented by the pottery and roof tile production. Conventionally, the former has been studied preponderantly. This paper is going to correct such deviation and raises understanding of the role of the latter.

Therefore, the author analyzed the assemblage of pottery forms at Chin tolgoi kiln site in Mongolia, and compared that result with the assemblage of them in Chin tolgoi city site and the china and porcelain assemblage in the Kitai Empire domain. As a result, it was explained that local pottery production aimed at the sufficient supply of the daily tableware and container. Furthermore, the existence of specific ornament and pottery form suggests that some ethnic groups were engaged in local pottery production.

(うすき いさお 札幌学院大学人文学部教授 考古学・文化財学専攻)